

# 学位論文審査の要旨

論文提出者	山本 一郎
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部 教授 住友 伸一郎 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 玄 景華 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 裕 哲崇
論文題目	唇顎口蓋裂の有無による日本語話者の子音発声時の舌と口蓋の接触パターン
論文審査の要旨	<p><b>【目的】</b> エレクトロパラトグラフィ (EPG) を使用した視覚的フィードバック訓練は、口蓋裂術後の治りにくい異常構音の治療に使用されてきた。通常この訓練では口唇口蓋裂を持たない典型的な日本人話者 (健常者) の EPG で描記された舌・口蓋接触パターン (EPG パターン) が模範として用いられる。しかし、口蓋裂術後患者の口腔環境は健常者のそれとは著しく異なっている。そのため訓練によって正常構音を獲得した口蓋裂術後患者では構音時の舌と口蓋の接触態様は異なる可能性があり、健常者から得た EPG パターンを口蓋裂術後患者の訓練に使用するには疑問が残る。そこで、健常者と訓練により異常構音が無くなった口蓋裂術後患者の発語時の EPG パターンを比較検討し、訓練の有用性を検証した。</p> <p><b>【方法】</b> 片側性唇顎口蓋裂 (UCLP) 術後患者で、経験ある言語聴覚士に異常構音なしと判定された 15 名を UCLP 群とし、15 名の健常者を対照群とした。各々の発語時の EPG パターンを抽出し、同一発語の EPG パターンを群内で累積し、両群の累積 EPG パターンを比較検討した。量的分析には舌の重心位 (CoG) と変動係数 (VI) を用いた。</p> <p><b>【結果】</b> 各々の歯茎音の EPG パターンは類似しており、両群間で差は認めなかった。UCLP 群の CoG は/s/において有意に低い値を示した。VI は UCLP 群で対照群より高い値を示したが有意差は認められなかった。</p> <p><b>【考察】</b> Smahel らの研究にも示されるように、口蓋裂術後患者の口蓋の高さは健常者に比べて男女とも低く、より平坦な口蓋形態を呈することが知られている。Brunner らは口蓋裂等の異常がない人から、平坦で低い口蓋の者とドーム型で高い口蓋の者を選び、EPG パターンの違いを比較し、その結果に有意差は認めなかったと報告している。本研究では口蓋裂術後症例であるが、矯正治療も完了し良好な咬合状態を呈しているために、健常者との形態的な差異は、ほぼ口蓋部の高低や凹凸の有無に限られるために、EPG パターンも健常者のそれと有意差を認めなかったものと考えられ、訓練の模範となり得る。しかし、口蓋裂術後患者においては異常な歯列・咬合を持つ症例も多くこの結果をそのまま適応できるものではないと考える。今回の研究対象は 15 名と少数で、どのような口腔環境が構音に影響を与えるのかさらなる研究が必要であると考えられる。</p> <p><b>【結論】</b> 口蓋裂術後患者の EPG を用いた訓練の際に、健常者の EPG パターンを模範にできると考えられた。</p> <p>以上の内容から本論文は学位にふさわしいものと判断した。</p>



